

Journal of Experimental Psychology: General, 2003, Vol. 132, No. 3, 455-469.

Contextual variation in implicit evaluation

Jason P. Mitchell, Brian A. Nosek, & Mahzarin R. Banaji

複雑なシステムについての考えを作り出し、コミュニケーションするために、メタファが役立ってきた。心理学者も、脳と心と環境の相互作用を理解するために、メタファを使ってきた。Smith(1996)によれば、心的表象の性質を解釈するメタファとして、80年代までは心的表象を（貯蔵したり取り出したりできる）モノ(things)として考えてきた。貯蔵庫の豆缶のように。最近では、心的表象を活性の分散パターンとして考えている(McClelland & Rumelhart, 1985)。これらのメタファ(things vs. ideal neural networks)の間には、心的表象に関して仮定される特徴に違いがある。構造だけでなく、学習と検索についても。伝統的モデルでは、「学習には新しい表象の明示的構築が関わり」、「表象は受動的かつ不活性」で、「表象の使用には、活性化（貯蔵庫からの検索）とそれに続く使用という2つの段階がある」(Smith & DeCoster, 1998, p.22)。分散モデルでは、「表象は、検索され使用されるまで不活性状態で貯蔵されるような静的な実体ではなく、単一のメカニズム（ユニット間のコネクションに沿った活性の流れ）で情報の貯蔵の処理も両方説明される」(Smith & DeCoster, 1998, p.22)。Smith(1996)は「表象は探索されるというよりも再作成されると考えるほうがよい」と言っている。もしそうなら、分散モデルは新たな理論的問いを生み出す。

ここでは特定の心的表象、すなわち**態度**(or **評価**)、特に比較的意識制御の外で働く態度、に焦点をしばる。態度が文脈的パラメタの下で再構成されるパターンならば、動的で変動的な特徴をもつはずだ。

しかし、素朴にも科学的にも、態度とは安定したものと考えられてきた。よって、態度が文脈的に変動するなどということは受け入れがたく見える。

実際に Abelson (1988) や Gross & Ellsworth (2003)は、人々は考えが変わっていないことに高い確信を示す、と言う。「急激な改宗の体験以外では、人々が態度変化を自覚していることは稀である」

態度が文脈に敏感だという研究ももちろんある。有名な Asch の一連の研究など。よって社会心理学者は、確かに文脈によって自己報告される態度はシステムティックにシフトするが、それは確信を伴って強い態度がとられるような対象を実験室研究が扱わないから起こるのだ、と考えてきた。フィールド研究や日常的体験からは、態度が長期的で変化しないと見える。

態度は安定したものだという考えは、無意識的態度に関して特に顕著だ。それが意識から乖離しているということから、順応的ではなく、文脈の変動の結果として変化することはありそうにない、と考えられてきた。

行動制御のモデルは、一般的現象として自動的行動（自動的評価も含む）はトリガー刺激の存在によって不可避免的に引き起こされ、注意資源を要する二次的な制御過程によって作り変えられるのみだ、と言っている。(Norman & Shallice, 1986; Wegner & Bargh, 1998)

Contextual Effects on Automatic Attitudes

Blair(2002)は文脈的特徴が自動的態度を形づくり得ることを示す研究をレビューした。例えば、Dasgupta & Greenwald (2001) : ポジティブな African American を提示すると、統制条件に比べて、その集団への評価がネガティブではなくなった (IAT を利用)。自動的態度は不変だという期待に反して。

Lowery, Hardin, & Sinclair (2001) : African American の実験者の場合、European American の実験者に比べて、African American 集団への評価がよりポジティブになった。
意識外の態度も文脈の関数として変動する可能性がある。

この研究結果は、自動的態度の変化に関する 2 種類のモデルの両方に適合している。

stable-but-malleable view: 被験者は African American に対して安定したネガティブな態度を持っているが、ポジティブな事例にさらされることで一時的にポジティブな方向へ態度をシフトした。しかしこの事例のインパクトは時間を経ると減衰する。実際、Dasgupta & Greenwald (2001)では、24 時間後にもう一度測定するとポジティブになっていた。すなわち、安定したベースラインの態度へ戻る。

attitudes-as-constructed view: 安定した前もった態度などというものは存在せず、態度変化に見えるものは実は態度構築である。そのようなボトムアップで構築される態度というのは必然的に環境にある情報を取り込む。ポジティブな African American の事例が提示されればいくらかのポジティブイティが組み込まれる。もし同じ対象について違う文脈でのちほど測定したなら、異なる情報素材を組み込むことになり、態度の構築は前の文脈でのものとは異なるだろう。24 時間後にネガティブになったのはベースラインみたいなものへ戻ったことを表しているのではなく、異なる文脈で別の態度が引き出されたことを表す。

これまでの自動的態度変化の研究からはどちらの見方がよいのかわからない。前者は自動性の理論 (Wegner & Bargh, 1998)によって支持されているし、後者は表象の再構築性の理論 (Smith, 1996)によって支持されている。

本研究では、これら 2 つの可能性のどちらなのか示すことを試みる。

IAT

Implicit Association Test (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)はターゲット概念(e.g., Black or White)と評価的属性(e.g., good or bad)の間の連合の差異を測定できる。

その根ざす基本原理は、連合した概念に対して同じ行動的反応をするほうが連合していない概念に対してよりも簡単であるはずだ、というもの。

評価的プライミング課題(Bargh, Chaiken, Govender, & Pratto, 1992; Fazio, Jackson, Dunton, & Williams, 1995; Fazio, Sanbonmatsu, Powell, & Kardes, 1986)に類似して、以下を仮定する。

(a) 評価的連合の強度は測定可能である。

(b) 概念が評価的意味 (semantic meaning とは独立) を共有する程度はそれらを心的にペアにすることの容易さで示される。

(c) 評価的連合の強度を測定する方法の一つは 概念+評価 ペアのスピードを測定することである。

(d) できるかぎり速く反応するという条件の下で測定された評価的連合の強度は自動的態度の測度である。

IAT は、態度概念（例えば old-young のような社会的集団）を評価的属性（例えば good-bad）や純粋に評価的ではない特定の属性（self-other, home-career, science-arts）とペアにする過程で得られる、反応潜時指標に依拠している。コンピュータ版の課題では、ペア化は反応のために同じキーボードキーを割り当てることで行われる。

young という文脈における old+good ペアと old+bad ペアの速さの差分（すなわち相対的容易さ）が潜在的評価（すなわち態度）の強度の測度と解釈される。

態度の方向（ポジティブ vs. ネガティブ）とマグニチュードの両方を反映する差分得点が IAT 効果である。有意性検定に加えて、この測度については効果サイズのテストが報告されることがよくあり、その多くは IAT 効果が大きいと示している。

The Current Research

実験 1 では、有名な黒人アスリートと白人政治家に対する自動的態度が人種もしくは職業によるカテゴリ化の関数として変化することを示す。

実験 2 では、カテゴリ化のシフトと、集団を構成する事例のアイデンティティの両方に IAT が敏感であることを示す。

実験 3 では自動的態度における文脈効果を追試し、被験者が変化を予期しない条件下でも急激な自動的態度のシフトが起こることを示す。これによって態度が変化しにくいと信じるようになる 1 つの理由を提言する。

実験 4 と 5 では、GNAT を用いて、実験 1 ~ 3 の手続き上あり得る交絡を取り除いた上で、自動的態度のさらに劇的な変化を調べる。

多くの研究者が、評価と判断は人を社会的集団のメンバーとしてカテゴリ化することの避けられない結果である、と言ってきた(Brewer, 1988; Devine, 1989; Fiske & Neuberg, 1990)。

多重にカテゴリ化可能な社会的ターゲットでは、意識レベルでも、複数の相互矛盾する評価が活性化される。

attitudes-as-constructed view では、ターゲットのある特徴を強調することで自動的態度が変動すると予想する。

Experiment 1: Context-Driven Shifts in Automatic Attitudes

概要

事例を分類する枠組みが操作され、被験者は 2 種類の課題を行った。好まれる黒人アスリートと嫌われる白人政治家について、職業でカテゴリ化する課題と人種でカテゴリ化する課題。

自動的態度がボトムアップで構築されるなら、事例の特徴の顕著性が変われば自動的評価も変化するはず。例えば、マイケル・ジョーダン是有名なアスリートであり黒人男性だが、彼が引き出す自動的評価は彼にバスケットボールコートで出会うか他のところで出会うかに依存するだろう。よって、人種でカテゴリ化するか職業でカテゴリ化するかで黒人アスリートと白人政治家の自動的評価は変わると予想した。

方法

参加者：Yale 大学の 91 名。\$10 もらうか心理学入門授業の部分的クレジットかで参加した。コンピュータの故障でデータが消えたため 2 名、速すぎる反応が多すぎる（試行の 10%以上が 300ms 未満）ため 7 名、の参加者は分析から除外された。

刺激：参加者は 19 人の有名な男性アスリート（13 人は黒人）と 19 人の男性政治家（14 人は白人）について、9 段階尺度（1 = とても嫌い、5 = どちらでもない、9 = とても好き）で評定した。もしその名前を知らないときは unfamiliar に つけた。最も好まれた 3 人の黒人アスリートと最も嫌われた 3 人の白人政治家が、続く IAT 課題でのその参加者用の刺激として選ばれた。good(e.g., caress)と bad(e.g., agony)の評価的カテゴリを表す項目は Greenwald et al.(1998)から得た。これまでの知見から、人種や職業については強い評価が観察されるはずである。

装置とプログラム：刺激提示は IBM (80486 プロセッサ) デスクトップ・コンピュータ上で Inquisit(Version 1.00)を走らせて行われた。左が正解なら左手の人差し指 (A キー)、右が正解なら右手の人差し指 (テンキーの 5 キー) を押すよう教示。刺激は画面中央に提示され、ターゲットのオンセットから正しい分類までを反応時間として記録した。試行間には 150ms のインターバルを入れた。カテゴリ化ラベルをターゲットの左右に置いた。誤って分類された場合はターゲットの下に X が表示され、正しく反応するまでプログラムは休止した。

手続き：参加者は最初にアスリートと政治家についての好みの評定を行い、続いて人種もしくは職業でカテゴリ化する IAT (順序はカウンターバランス) を行った。課題は Greenwald et al.(1998)の基本的な手続きに従って、各条件で 40 試行を行った。

デザイン：2 (ブロック：黒人 or アスリート + good、黒人 or アスリート + bad) × 2 (カテゴリ化課題：人種、職業) の参加者内計画。理論的関心はないが、名前評定順序 (政治家が先、アスリートが先) 課題順序 (人種カテゴリ化が先、職業カテゴリ化が先) 黒人順序 (黒人 or アスリート + bad が先、黒人 or アスリート + good が先) は被験者間でカウンターバランスされた因子で、これらのどれも人種 vs. 職業課題の比較と交互作用していなかった (all F s < 1.33, all p s > .25)。

結果と考察

準備

IAT 得点化アルゴリズム (Greenwald et al., 2003) に従ってデータを用意した。

- 反応潜時が 400ms より小さい試行や 10,000ms より大きい試行を除外 (31,640 試行中 9 つ、.028%)
 - 300ms 未満の試行が 10%以上ある参加者を除外。
 - 残りのすべての反応潜時を分析に含める。
 - 2 つのクリティカル・ブロックの間の差分得点 (IAT D) を算出。(アスリート+bad & 政治家+good) - (アスリート+good & 政治家+bad)。両ブロックの潜時の SD で割った。
- この得点が IAT D 効果：正の値が黒人アスリートより白人政治家を好むことを示す (両方の課題で)。解釈の簡単のために、図では IAT D 効果を算出する前の平均反応潜時を示してある。

人種か職業かによる自動的態度の違い

予想通り、カテゴリ化の仕方による態度の違いが見られた (Figure 1 左側)。

つまり、ターゲットに遭遇する文脈の関数として、異なる自動的態度が喚起される。マイケル・ジョーダンなどの有名な黒人アスリートが職業でカテゴリ化された場合、ポジティブな自動的態度が喚起されるが、人種でカテゴリ化されるときは喚起される態度が質的に異なる。

しかし、あり得る解釈として、IAT は単にカテゴリラベルへの態度を測定していて、カテゴリの事例はここでの自動的態度に関係ない、とも考えられる。すなわち、この実験での操作によって、多重にカテゴリ化可能なターゲットへの自動的態度を測定したのではなく、2つの異なる態度対象（一方ではアスリートと政治家、一方では人種）への態度を測定したのかもしれない。これをはっきりさせるため、フォローアップの実験を行い、IAT が自動的態度の測定に用いられた事例のアイデンティティに敏感であることを示す。

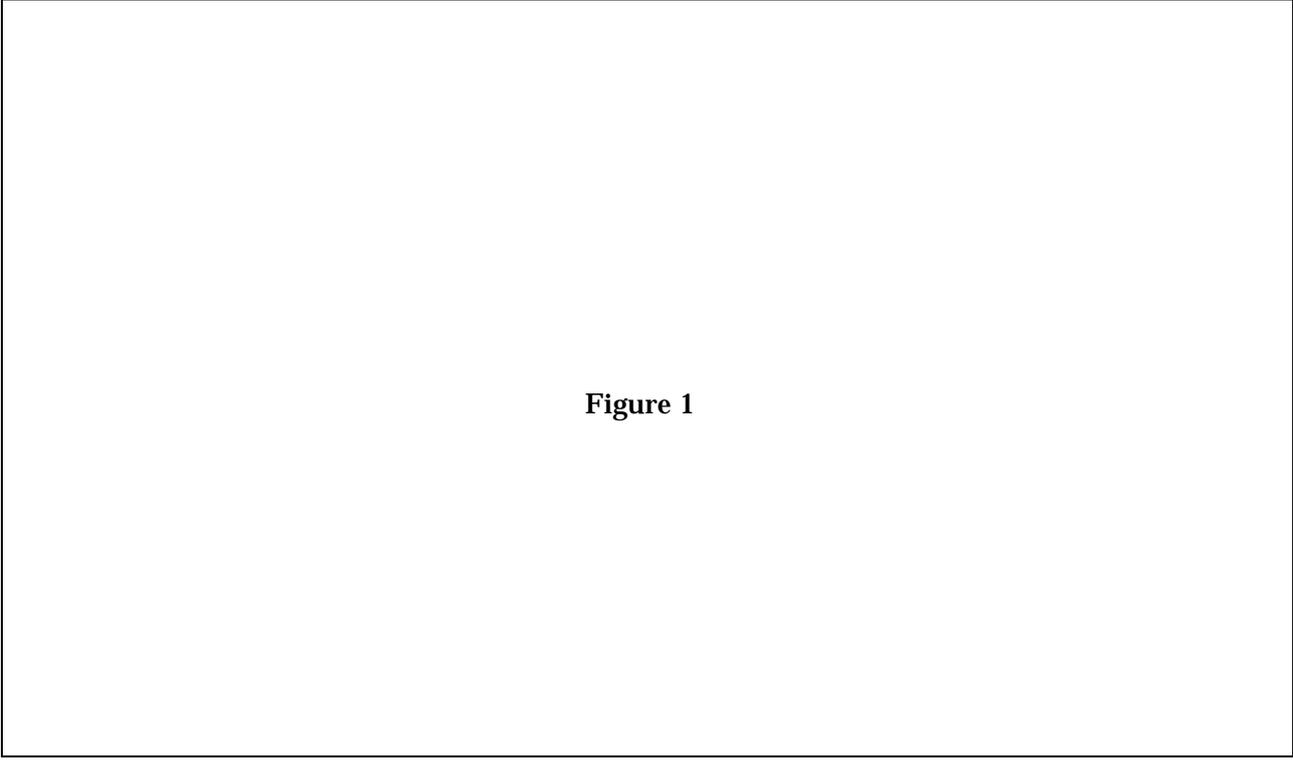


Figure 1

Experiment 2: The Role of Exemplars in Automatic Attitudes

実験2では、事例を変えながら、1つの次元（人種）に対する態度のみを測定した。参加者は同じ2つの人種カテゴリ化課題（一方では好まれる黒人と嫌われる白人、もう一方では嫌われる黒人と好まれる白人）を遂行した。

主たる関心は文脈的シフトについてだが、この実験はIATを使った潜在的態度の研究に頻発する問題をテストすることにもなる。すなわち、IAT効果は単にカテゴリラベルの関数であるのか（De Houwer, 2001; Fazio & Olson, 2003）、事例が喚起される態度の一因となるのか？

Black Americanのポジティブな事例が通常得られるよりもポジティブな態度を生み出すなら、IATによる態度が単にカテゴリラベルによるものだという主張に食ってかかれる。

方法

参加者：58名のYale大学の学生。心理学入門授業の部分的クレジットで参加。4名は速すぎる反応が多いため除外。

刺激：参加者は、エンターテナー（ミュージシャン、役者）、アスリート、政治家が含まれた2つのリ

スト（1つは45人のBlack American、もう1つは57人のWhite American）それぞれについて、好きな3人と嫌いな3人を示した。もしリストになかったら名前を出すようにした。評価的な単語は実験1と同じ。

手続き：参加者はまずターゲットを選び（上記）、2つの人種カテゴリ化 IAT 課題を行った。一方の課題では好きな黒人と嫌いな白人、もう一方では嫌いな黒人と好きな白人、が用いられた。両課題とも同じカテゴリラベル（Black, White）でカテゴリ化を行った。

デザイン：2（ブロック：Black+good, Black+bad）× 2（事例セット：好きな黒人と嫌いな白人、嫌いな黒人と好きな白人）の参加者内計画。事例セット順序、黒人順序はカウンターバランスされた因子で、両方とも関心のある比較との交互作用はなかった。

結果と考察

主たる関心は、事例が異なることによって自動的な人種への態度が異なるかどうか。もしそうなら、好まれる黒人事例への態度はそれほどネガティブでないはず。一方、自動的な人種への態度が事例に敏感でなければ、同じくらいネガティブな人種態度が観察されるはず。

実験1と同様の得点化アルゴリズムでデータを用意。予想される通り、Black よりも White に対して強い選好が示された。しかし、好まれる黒人と嫌われる白人での課題では、IAT D 効果は有意でなくなった。2条件を比較すると、嫌いな黒人条件よりも好きな黒人条件のほうが自動的評価は有意に高い。すなわち、IAT は社会的集団を表すのに用いられた特定の事例に敏感である。

実験1とあわせると、IAT で測られる自動的評価は事例とカテゴリの両方の影響を受けられると思われる。しかし、この構成事例とカテゴリラベルのインタラクションのせいで、IAT は自動的評価への文脈的効果について曖昧でない測度を提供できない。この限界は実験4、5にて補われる。それよりも先に、

理論的関心として、人々は、ターゲット（例えばマイケル・ジョーダン）がある文脈ではとてもポジティブな自動的評価を喚起し、別の文脈ではニュートラルもしくはネガティブな態度を喚起すると予想できるだろうか？あるいは、評価は文脈を越えて安定であると予想するのだろうか？

また、2つの実験で見られた評価のシフトを生じるプロセスは全体的に自動的ではなく、統制された顕在的メカニズムの働きを反映しているかもしれない。IAT は自己提示されたアーティファクトではないと言われてきたが、これほど急激にシフトする態度はこれまで扱われていないし、課題要求を変化させたことでこれまでの研究では無かったトップダウンプロセスを働かせたかもしれない。

よって、実験3ではシフトを意識的に予想できるかどうかを調べた。

Experiment 3: Explicit Predictions of Automatic Attitudes

実験3は部分的に実験1の追試である。好まれる黒人アスリートと嫌われる白人政治家を用いて2種類のカテゴリ化課題を行う点は同じ。

参加者は各ブロックの前に、どれくらいのスピードで課題を行えるかを予想した。IAT 課題のスピードを言語化することはできそうにないので、参加者は予想するスピードと同じスピードでキーを押すことで IAT での反応をシミュレートした。

もし参加者が態度のシフトをシミュレートできるなら、文脈の効果は意識的に理解されていると考えられる。シフトを予想できなかったなら、シフトは意識的にアクセスできず、行動が変化しても態度の安

定性の感覚が維持されるメカニズムを示唆する。

方法

参加者：Harvard 大学の 32 名。\$5 で参加。6 名はシミュレーション課題の教示に従わなかったため分析から除外。

手続き：最初の好みの評価は実験 1 と同様。最初の IAT 課題として、Coke と Pepsi cola に対する態度を測定した。これは IAT とシミュレーション課題の導入のための練習フェイズ。2 つの IAT 課題は実験 1 と同じで、シミュレーション・ブロックが入っている点だけが異なる。

Coke-Pepsi 課題では最初に評価的単語の good/bad カテゴリ化を練習し、次に Coke 関連の絵、Pepsi 関連の絵のカテゴリ化を練習した。その後 2 重カテゴリ化配置のうちの 1 つを行った。

実際のカテゴリ化課題の前に、予想するスピードのシミュレーションを行った。参加者は自分が予想する速さでキーを 20 回押した。画面には数字が表示され、20 からキーを押す度に 1 ずつ減っていき、各キー押しまでの反応時間が記録された。各ブロックの最初の 2 試行はバッファ試行として分析から除かれ、3~15 の試行を予想された反応潜時を算出するため用いた。

シミュレーション・ブロックの後、実際のカテゴリ化課題を 20 試行行い、休憩し、さらにカテゴリ化課題を 40 試行行った。

クリティカル・ブロックを完了した後、Coke、Pepsi の反応キーを逆転し、Coke と Pepsi の絵のカテゴリ化を練習した後、2 重カテゴリ化配置を行った。このブロックでは再びシミュレーションを行い、その後実際のカテゴリ化 20 試行、休憩、40 試行と続いた。

この練習 IAT の後、人種カテゴリ化課題と職業カテゴリ化課題を行った。

デザイン：2 (ブロック：黒人 or アスリート + good, 黒人 or アスリート + bad) × 2 (カテゴリ化課題：人種、職業) × 2 (反応フェイズ：シミュレート、測定)。名前評価順序、課題順序、黒人順序は参加者間でカウンターバランスされ、関心のある比較との交互作用はなかった。

結果と考察

分析にあたって、16,001 試行のうち 7 つ (.044%) が外れ値のため除外された。

実験 1 と同じく、カテゴリ化課題によって自動的評価に違いが見られ、職業では黒人アスリートが有意に好まれるが、人種では有意な差はなかった (Figure 1 右側)。両課題間の効果の比較は有意なシフトを示した。

しかし、シミュレーション・フェイズではこの比較は有意でなく、シフトを予想できていなかった。シミュレーションは人種課題でも職業課題でも黒人アスリートが好まれるという結果を示した。各課題 (コーラ、人種、職業) についてシミュレーションと実際のパフォーマンスの相関をとったが、どれも有意でなく、参加者はパフォーマンスを予想できていないことが示された。

各条件について、実際のパフォーマンスとシミュレーションの両方で差分得点を算出し相関をとったが、有意ではなくわずかに負の相関だった。すなわち、参加者は実際のシフトを予想できなかった。

Experiment 4: Context as Category Distinctiveness

実験 1 ~ 3 ではカテゴリ化の仕方を変えることで態度が変わるか調べたが、attitudes-as-constructed view によれば、態度シフトはもっと些細な文脈の操作でも起こるはずだ。ここでは、ターゲットの特徴の弁別性を用いて、態度がシフトするかを調べる。

実験 4、5 では多重にカテゴリ化可能なターゲットとして、黒人女性と白人男性を用いた。人種が目立つなら黒人女性がネガティブ、白人男性がポジティブに評価されるはずだが、ジェンダーが目立てば黒人女性がポジティブ、白人男性がネガティブに評価されるはず。

これらの特徴を目立たせるために、カテゴリ弁別性(ターゲットがディストラクタと異なっている部分)を操作し、態度の測定のために GNAT を用いた。

GNAT

Go/No-go Association Task (Nosek & Banaji, 2001)

「強く連合している項目に対して同じ反応をするほうが、弱く連合している項目の場合よりも、パフォーマンスは優れる」という IAT や他の反応競合課題と同じ論理に基づく。IAT と異なるのは、対照的なカテゴリを必要とせず、単一のカテゴリに対する評価を測定するところ。参加者は、項目がカテゴリに当てはまれば指示されたデッドラインまでにキーを押し(単一のキーが用いられる)、当てはまらなければ無視する。

デッドラインを設けることで、GNAT は短い時間での反応を要求する。また、指標として、反応潜時ではなく、信号検出理論での敏感性の推定量である d' を用いる。

GNAT は自動的態度を測定するのに対照的なカテゴリが必要ない。IAT と GNAT は両方とも対照的なカテゴリとの相対的な自動的態度を測定できるが、GNAT においては、ディストラクタを自由に操作でき、一元的なカテゴリを作る必要がない。また、ディストラクタのセットの変化へ参加者の注意を引くこともない。

この利点から、実験 4、5 では GNAT を用い、弁別性が変わるようディストラクタを操作する。黒人女性と白人男性への自動的態度を、ジェンダーを目立たせたとき、人種を目立たせたとき、どちらも目立たせなかったときの 3 回測定する。

GNAT を用いることで、実験 4、5 では事例がカテゴリ化される方法を明示的に操作していない。実験 1、3 ではカテゴリ化の方法を強制的にスイッチさせる(すなわち文脈操作が明示的になる)という方法論的な限界があったが、実験 4、5 では明示的なカテゴリ化の変更なしに文脈を操作できる。

方法

参加者：Harvard 大学の白人女性の学部生 10 名。\$5 で参加。白人女性に限定したのは、先行研究(例えば Carpenter & Banaji, 2000)によってこの母集団が女性にも白人にも強くポジティブな評価を持っていることがわかっているから。

装置と刺激：刺激提示と反応潜時の記録は Macintosh G3 上で Psyscope を走らせて行われた。ポジティブ単語、ネガティブ単語、ステレオタイプ的な黒人女性の名前、黒人男性の名前、白人女性の名前、白人男性の名前をそれぞれ 15 ずつ用いた。

手続き：GNAT ブロックの最初で画面に 2 つのラベル(例えば Black female と good)が表示され、刺激項目が画面中央に 600ms ずつ順次提示された。参加者には項目がカテゴリに当てはまるならスペースキーを押し、当てはまらないなら何もしないよう教示。間違えるとブザーが鳴る。600ms のデッドラインと正解/不正解をもとに hit, correct rejection, false alarm, miss を選り分けた。 d' を敏感性の指標にした。

参加者はまず 6 つの練習ブロックを行った。各練習ブロックの最初に 1 つのカテゴリラベルが提示された。黒人女性、黒人男性、白人女性、白人男性、ポジティブ語、ネガティブ語の 6 種類。各ブロックは 26 試行で、半分は押すと正解の試行、もう半分は押さないのが正解の試行。押さないほうの項目は他の

5 カテゴリからランダムに選択された。

練習ブロックの後、20 の GNAT ブロックを行った。

上位集団ブロック：人種とジェンダーについて測定した。押す/押さないが 30 試行ずつ。

下位集団ブロック：黒人女性と白人男性について測定した。

デザイン：2（下位集団：黒人女性、白人男性）× 2（単語の valence：good、bad）× 3（カテゴリ弁別性：ジェンダー、人種、ニュートラル）。加えて、4（上位集団：黒人、白人、女性、男性）× 2（単語の valence：good、bad）デザインで上位集団ターゲットについても態度を測定した。

結果と考察

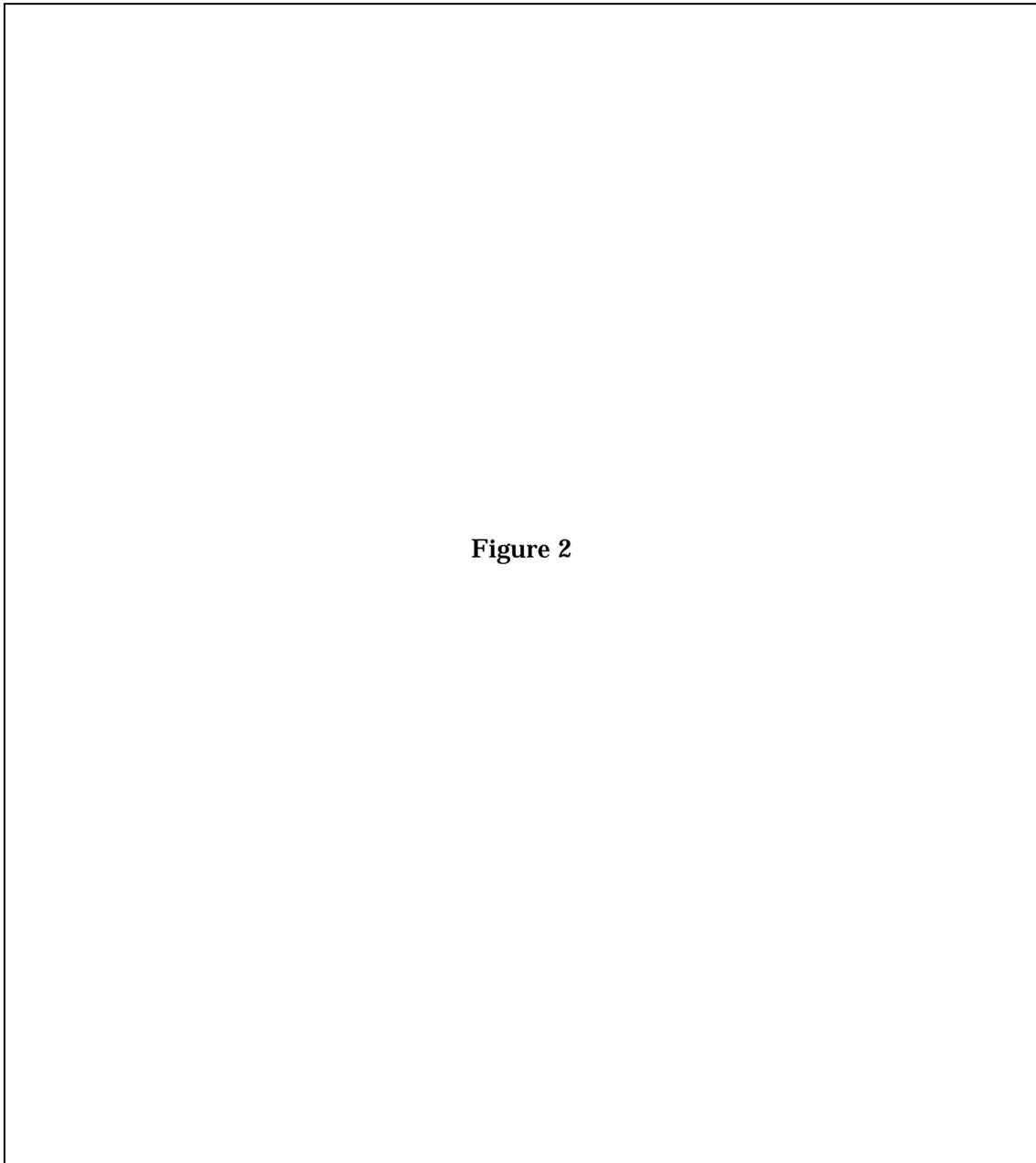


Figure 3

Experiment 5: Testing Category Distinctiveness with Pictures

言語的刺激ばかり使っているので、単語の代わりに絵を使って同じことを行った。

方法

参加者：Harvard 大学の白人女性の学部生 22 名。\$5 で参加。

刺激：Corel Mega Gallery のクリップアート CD-ROM からのカラー画像を用いた。ポジティブ・オブジェクト、ネガティブ・オブジェクト、黒人女性の顔、黒人男性の顔、白人女性の顔、白人男性の顔、それぞれ 15 ずつ。

手続き：実験 4 と同様。ただし、画像は言語的刺激よりもすばやく分類できるので、デッドラインは 500ms に変更。

結果と考察

Figure 2, 3 を参照。

General Discussion

自動的態度は直近の体験によって形作られるかもしれないということが最近言われてきた。これまでのこのトピックの研究は、事例を操作してきた。本研究では、同一の事例について、自動的態度が急激にシフトすることを示した。これによって、もはや同じ態度対象であっても同じ自動的評価が喚起されるとは限らない。

実験 1 は、よく知られた強く好まれるターゲットについてさえ、個人内の自動的態度が短時間で変動することを示した。実験 2 は Black/White のカテゴリの自動的評価も事例が変われば劇的にシフトすることを示した。

実験 3 は、実験 1 を追認し、さらに参加者が文脈の効果を予期できないことを示した。

実験 4、5 はこれら発見を 2 つの点で推し進めた。1 つは、これまで報告されたよりもさらに劇的な自動的態度の変化を示したこと。もう 1 つは、文脈のわずかな変化が自動的態度の変化を生み出すこと。

The Notion of Attitude Change

態度対象によって喚起される評価の質的差異は、態度の変化（これは本当の、安定した態度なるものを要する）を表していない。むしろ、自動的態度は状況によって確立する文脈内で定義される。

安定性や単一の本当の態度が存在するという見かけは、評価が連続的、能動的に構築されているという事実を覆い隠す、環境における高い一貫性から生まれる。

自動的態度についてのこのような見方は、エピソード記憶に関する今日の見方と近い。通俗心理学的スタンス、初期の理論的スタンスは記憶を逐語的にプレイバックできる忠実な歴史記録だとしてアプローチしたが (Roediger, 1980 を見よ)、最近の研究は、想起という行為が本質的に構築的過程であり、それによって記憶は文脈による歪みに影響されやすいのだ、と示している (Loftus, Miller, & Burns, 1978)。ミスリーディングな情報が記憶をゆがめると同様に、明示的態度も回顧的バイアスを導く。Ross, McFarland, Fletcher (1981) は歯を磨く頻度と健康に関するポジティブもしくはネガティブな結果を結びつけて参加者を説得した。その後この 2 週間で歯を磨いた回数を思い出すよう言われると、良い事があると説得された参加者はそこそこの頻度にしておくのが最適だと思っている参加者よりも多くの回数を報告した。

The Notion of a True Attitude

よくある思考実験「鏡の部屋に入れられたカメレオンはどんな色になりますか？」

この難問は、カメレオンが実際に持っている 1 つの本当の色（カメレオンは急速に環境と同化するのでこの色が直接観察されることはない）、という仮定に乗っている。

同様に、社会心理学者も、ある態度対象について人は 1 つの真の態度をもっているはず（この本物の態度の表出が自己報告でバイアスがかかっていたり正確な内省が不可能だったりして妨げられているとしても）と暗黙に仮定している。

自動的態度の測定はこのカメレオンの鏡として出され、曖昧な影響を除いた態度を測定するという試みにおいて、安定した純正な態度が存在し、潜在的測度が本物の態度を観察するレンズとなる、と仮定さ

れてきた。しかし、いくつかの研究や本研究はこれに疑問を投げかける。

文脈の変動に伴って、ある態度対象について複数の評価が喚起され、それらのどれも他より真だということはない。

よく知られたベースボールの逸話が思い出される。“Well, was it a ball or a strike?” “What do you mean, was? Son, it ain't nothing until I call it!”

絶え間なくシフトする文脈のもとでは、ポジティブな評価もネガティブな評価もあり得るし、ありそうだ。社会的対象についての単一の真なる評価の探索を放棄することが、評価の真の性質の理解を追求するためには必要である。